

# 「これは、どこの国旗？」指導資料

## 【題材の概要】

太陽や月、星などの「天体をモチーフにした国旗」を採り上げ、国旗に対する思いや願いなどを考えていく。児童は、世界のおよそ40%の国々が天体を描いた国旗を採用していることをクイズをとおして知る。次に、お互いの国旗を見せ合いながら、国名や場所、モチーフなどを話題にした会話に取り組む。その際、太陽や星などモチーフの種類ごとに色分けをしながら世界地図（国旗の裏面）に色を塗る。例えば、日本やバングラデシュなど太陽を描いた国を赤で塗り、星を描いた国を青で塗るようにしていく。その後で色を塗った地図を見ながら、色によってはある地域に集中していたり、反対に世界中に分散していたりするなどの特徴を考える。さらに、それぞれの国の国旗に対する思いや願いについて考えたり予想したりしながら、最後に教師の説明を聞く。

これまでに、国旗を扱った学習の経験がある児童がいることも十分考えられるが、以上のように天体をモチーフにした国旗を対象にすることで、児童は新鮮な気持ちで意欲的に活動に取り組めるものと考えられる。なお、児童の実態等を配慮し、「モチーフ」という言葉よりも、「～をデザインした、描いた」などの表現が望ましいと考える。

## 【国際理解との関わり】

児童は、天体をモチーフにした国旗に触れることで、国旗に描かれた太陽や月、星などにどのような意味が込められているのかを考える。その中で、その国の歴史や風土、宗教、国民性などに触れながら国際理解を深めていく。本時への取組をとおして、天体を描いたものだけでなく、様々な国旗に込められた願いや由来に興味をもつとともに、各国の国旗を尊重する心情を育てていくことが期待できる。

## 【各教科等との関連】

社会科・・・世界中の中の日本の役割

理 科・・・月や星

## 【題材内容との関連事項】 \*学校の実態に応じて活用してください。

### 1 天体をモチーフにした国旗

#### <太陽>

太陽を国旗に採り入れている国は、日本も含めて15カ国以上ある。太陽は世界中のどこからでも見えることから、様々な地域の国が国旗に採り入れている。太陽を繁栄、躍進、自由などの象徴として用いている国が多い。



(日本)



(バングラデシュ)



(アルゼンチン)



(カザフスタン)

#### <月>

星との組み合わせでなく、月を単独で使っている国は少ない。ラオス国旗で月の色に白が使われていたり、パラオ国旗が日本の国旗を参考にデザインされていたりする点などは非常に興味深い。



(ラオス)



(パラオ)

#### <星>

描かれている天体の中でも最も多いのが星である。星のみがデザインされた国旗だけでも50カ国近くあり、太陽や月と組み合わせたものを含めるとさらに多くなる。星はその国の州、民族などの数を示したり、理想や主義などの象徴に使われたりしている。



(ガーナ)



(チリ)



(キューバ)



(ベトナム)

<南十字星>

オーストラリア、ニュージーランド、サモア、パプアニューギニアなど南半球の国で採り上げられている。



(オーストラリア)



(ニュージーランド)



(サモア)



(パプアニューギニア)

<天球儀>

天球儀(星の位置を地球儀のように表したものを)を外側から見た場合の星を描いている。そのため、地球から見える星の位置と異なり、南十字星が実際と比べ左右逆になっている。



(ブラジル)

<三日月と星>

この組み合わせはイスラム教の国に多く見られる。トルコの国旗が三日月と星を組み合わせることから、多くのイスラム諸国が同種のデザインを採り入れている。モーリタニア国旗の三日月は、水面に船のように浮かぶ姿をデザイン化されているのが特徴である。モーリタニアは赤道付近にあるため、夕方の西の空に、このような三日月が見えるからである。



(トルコ)



(シンガポール)



(モーリタニア)



(パキスタン)

2 その他のパターン

<アフリカに多く見られる配色>

アフリカ諸国の国旗に多く見られる配色で、アフリカ最古の独立国であるエチオピアが黄、赤、緑の3色を使ったことから、およそ20カ国がこの配色を使っている。それぞれの色の意味は国によって異なる。



ギニア



カメルーン



コンゴ



セネガル

<アラブ諸国に多く見られる配色>

赤、緑、白、黒は汎(はん)アラブ色と呼ばれ、アラブ諸国の団結を表している。



アラブ首長国連邦



クウェート王国



ヨルダン



スーダン

<十字架をモチーフにした国旗>

キリスト教の影響を強く受けており、十字軍への参加など歴史的な背景がある場合が多い。北欧に多く見られる。



スウェーデン



ノルウェー



アイスランド



フィンランド

【本題材に関連した英語表現】

<太陽や月、星などに関する発問について>

授業の最初に、天体について児童が英語で答える場面がある。ここでは、直接「太陽を英語で何というか。」と聞く言い方（パターン ）と、英語で太陽について言い、その後で the sun の意味を確認する方法（パターン ）を紹介する。これらは、多くの児童にとって未習事項であることが想定されるものの、star をはじめ日常生活の中で、一度は発音を聞いている可能性が高い単語である。児童の実態を踏まえ、分かりやすいヒントを与えながら英語だけで指導していくことも十分に可能である。

パターン	英 語	日 本 語
	太陽は、英語で何と言いますか。	What is Taiyo in English? How do you say Taiyo in English?
	空を見てください。	Look at the sky.
	今日は、晴れていますね。	It's fine today.
	太陽が見えますね。	We can see the sun.
	sun は日本語で何と言いますか。	What is the sun in Japanese?

<天体につける冠詞について>

the sun, the moon など基本的に唯一のものを表す場合は the をつける。一方、a star のように具体的に特定せず「星」という意味の場合は、a を用い、2 つ以上の複数の場合は、stars となる。従って、南十字星のように特定された星座の場合は、the Southern Cross となる。

<言語材料の扱いについて>

本時で扱う主な言語材料は、What is this country? / Is this a(the) ~? / Where is it? の3種類の疑問文とそれぞれに対する答えの表現である。さらに、描かれている天体についての会話で、「三日月と星」について尋ねる場合には、Is this a(the) ~?ではなく、Are these the moon and a star (stars) ? / Yes, they are. / No, they aren't. など複数形の表現が求められる。そのため、会話場面における児童の負担は極めて大きいと言える。そこで、児童の負担やデザインされた天体について考えるという本時のねらいを考慮し、2番目の言語材料である Is this a(the) ~ の部分だけを英語で行い、他の場面では日本語を用いることもできる。

また、冠詞の使い分け等についても、会話活動の目的が言語の正確な運用でなく、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成であるという点も踏まえ、児童に対して、いわゆるフルセンテンスと呼ばれる文法的に完璧な表現を求めず、Moon? / Yes. のように単語だけのやりとりになってもよいこととし、細かく指摘しない指導方針が望ましいと考える。

<天体を表す英語表現について>

三日月 (the crescent moon) 火星 (Mars) 水星 (Mercury) 木星 (Jupiter) 金星 (Venus) 土星 (Saturn) 北極星 (the polestar / the North Star) 天の川 (the Milky Way)

\* 火星 (Mars) をはじめ、大文字で始まる天体の古典語名には冠詞をつけない。